【研究ノート】

「点字本ゴッホ」という起点と真相

―― 式場隆三郎による日本点字図書館後援活動の継続調査より ――

実践女子大学短期大学部日本語コミュニケーション学科　准教授　西　脇　智　子

抄録

本年は日本点字図書館創設者の本間一夫と後援会長に就任した式場隆三郎のめぐりあいから70年の節目にあたる。筆者は、式場隆三郎による日本点字図書館後援活動史を探求するため継続調査を実施している。本稿では、この継続調査の研究対象（①式場隆三郎旧蔵資料「点字本ゴッホ」、②日本点字図書館所蔵資料「後援会発足準備」「盲人福祉調査渡米後援」）に着目し、式場隆三郎が「盲人福祉」に尽力した史実を明らかにする。

キーワード

本間一夫、式場隆三郎、点字本ゴッホ、盲人用具、日本点字図書館、日本点字図書館後援会

はじめに

本間一夫（1915-2003）が創設した社会福祉法人日本点字図書館の発展は数多くの人々の善意と奉仕の心によって今日まで支えられてきた。『日本点字図書館五十年史』の感謝録「忘れ得ぬ人々」には、「発展のエポックを画する力となったことを忘れてはならない」として、日本点字図書館後援会の会長に就任し支援活動に情熱を傾けた式場隆三郎（1898-1965）の名が掲げられている。この「発展のエポック」とは、隣接地買収の際に日点後援会長を引き受けられたこと、さらに世界盲人福祉会議への出席を積極的に援助し欧米訪問の機会に尽力したことを指している。この感謝録には、式場隆三郎が「自身の関係する守田勘弥後援会や医家芸術クラブなどの催し物の度ごとに足を運び、当館の実情を訴え積極的に寄付を呼びかけられた」と記されている（日本点字図書館50年史編集委員会編 1994：154）。

本間一夫と式場隆三郎とのめぐりあいから70年の節目を迎える。これを機に、筆者らは[註1)] 式場隆三郎が尽力した「日本点字図書館後援会」における活動の諸史実を探求するため、2021（令和3）年1月より日本点字図書館が所蔵する諸資料の発掘や関連する諸情報の収集整理分析作業を重ねてきた。式場隆三郎が日本点字図書館後援会の会長に就任した時期と日本医家芸術クラブ

の初代委員長として機関誌『医家芸術』を編集していた時期が一致していたことから、筆者は『医家芸術』創刊号から通巻100号に至る掲載記事調査を試みた結果、日本点字図書館に関連する記載箇所35件から有用な情報が得られた。すなわち、①日本点字図書館後援会創立準備の懇談会を開催した時期、②本間一夫と加藤善徳の世界盲人福祉協議会参加費調達のため、式場隆三郎が「盲人福祉調査渡米後援会」を結成した時期に関連する記載はもとより、③本間一夫自身による投稿が5件寄せられていたことも判明した。特筆すべき研究の成果は、外ならぬ本間一夫と式場隆三郎の縁を取り持った「点字本ゴッホ」が日本点字図書館に所蔵されていたという史実をつきとめたことであった（西脇 2022）。

そこで、日本点字図書館における再調査はもとより、近年、企画開催された「式場隆三郎展」[註2)]の展示品には、式場隆三郎が結成した「日本ヴァン・ゴッホ友の会」刊行の「点字本」が含まれていたことから、式場隆三郎旧蔵資料をも併せての継続調査実施が急務となっていた。

本稿は、研究対象である①式場隆三郎旧蔵資料「点字本ゴッホ」、②日本点字図書館所蔵資料「後援会発足準備」「盲人福祉調査渡米後援」に着目して継続調査を実施し、式場隆三郎が「盲人福祉」に尽力した史実を明らかにすることが目的である。

1.「点字本ゴッホ」の諸相

本章では、2021（令和3）年1月より着手した資料調査を継続した結果に照らして、①式場隆三郎とゴッホの世界、②日本点字図書館における「点字本ゴッホ」、③式場隆三郎旧蔵資料「点字本ゴッホ」に着目し、現時点で把握することができた「点字本ゴッホ」をめぐる諸相について述べる。

1－1. 式場隆三郎とゴッホの世界

八木謙治は、1966（昭和41）年2月号の『民芸手帖』に「式場隆三郎著作年譜」を掲載し、1914（大正3）年4月から1965（昭和40）年11月までに刊行された式場隆三郎の著作194冊を紹介している（八木1966：42-50）。この194冊の約32.5％にあたる63冊（戦前・戦中の11冊、戦後の52冊）は「ゴッホ」に関連する著作である。本間と式場の縁を取り持った「点字本」はゴッホに関連する著作63冊のうちの1冊にあたることが判明した。それは、1954年（昭和29）年1月に「東京・日本点字図書館」が刊行した『点字本ヴァン・ゴッホの生涯』（全二巻、評伝、本間一夫点訳、26 × 20㎝）を指している（表1）。

表１　「ゴッホ」に関連する式場隆場三郎著作数について

1）戦前・戦中の「ゴッホ」に関連する著作数

発行年	内訳（月別冊数）	
1932（昭和 7）年	4 月＝1 冊、5 月＝1 冊、12 月＝1 冊	3 冊
1934（昭和 9）年	8 月＝1 冊	1 冊
1935（昭和 10）年	6 月＝1 冊	1 冊
1938（昭和 13）年	10 月＝1 冊	1 冊
1939（昭和 14）年	2 月＝1 冊	1 冊
1941（昭和 16）年	3 月＝1 冊	1 冊
1942（昭和 17）年	11 月＝1 冊	1 冊
1943（昭和 18）年	2 月＝1 冊、8 月＝1 冊	2 冊

（小計 11 冊）

2）戦後の「ゴッホ」に関連する著作数

発行年	内訳（刊行・発行の月および冊数）	
1946（昭和 21）年	11 月＝1 冊、12 月＝1 冊	2 冊
1947（昭和 22）年	6 月＝1 冊、12 月＝2 冊	3 冊
1949（昭和 24）年	11 月＝1 冊	1 冊
1951（昭和 26）年	1 月＝1 冊、9 月＝1 冊、12 月＝1 冊	3 冊
1952（昭和 27）年	2 月＝1 冊、3 月＝1 冊、6 月＝2 冊、10 月＝1 冊	5 冊
1953（昭和 28）年	1 月＝1 冊、5 月＝1 冊、6 月＝1 冊、7 月＝1 冊、9 月＝2 冊、10 月＝1 冊、12 月＝1 冊	8 冊
1954（昭和 29）年	1 月＝2 冊（このうち 1 冊が点字本）、4 月＝1 冊、8 月＝1 冊、11 月＝1 冊、12 月＝1 冊	6 冊
1955（昭和 30）年	3 月＝1 冊、4 月＝1 冊、6 月＝1 冊、11 月＝1 冊	4 冊
1956（昭和 31）年	3 月＝1 冊、5 月＝1 冊、6 月＝1 冊、8 月＝1 冊、9 月＝1 冊、10 月＝1 冊	6 冊
1957（昭和 32）年	8 月＝1 冊、9 月＝4 冊、11 月＝1 冊	6 冊
1958（昭和 33）年	1 月＝1 冊	1 冊
1960（昭和 35）年	7 月＝1 冊	1 冊
1961（昭和 36）年	1 月＝1 冊、8 月＝1 冊、9 月＝1 冊	3 冊
1962（昭和 37）年	4 月＝1 冊	1 冊
1965（昭和 40）年	2 月＝1 冊、11 月＝1 冊	2 冊

（小計 52 冊）

出典：八木謙治（1966）「式場隆三郎著作年譜（1914-1964）」『民芸手帖』（92）、42-50.
この年譜に照らして、「ゴッホ」に関連する式場隆三郎の 63 冊の著作数一覧を筆者が作表した。

八木謙治が作成した著作年譜には、『点字本ヴァン・ゴッホの生涯』という書名が明記されているが、そもそも、どのような刊行本を点訳したのか不明であった。いわゆる「点字本ゴッホ」に関する掲載情報一覧の作成を試みたが、情報は拡散しており式場隆三郎が本間一夫に相談したいわゆる「点字本ゴッホ」を特定する作業は難渋した（表 2）。

表２「点字本ゴッホ」に関する「書名」の掲載情報一覧

註＝次の７件の書名の所在については、各資料から筆者が書き写し作表したものである。

1）書名『点字本ヴァン・ゴッホの生涯』

書名	内容 （著・編・訳・その他）	装幀、判、版	発行所	年代
点字本ヴァン・ゴッホの生涯	全二巻、評伝、 本間一夫点訳	26 × 20 ㎝	東京・日本点字図書館	昭和 29 年 1 月 （1954）

※掲載書の出典：

式場隆三郎（1960）「式場隆三郎著作年譜（1914～1960）」『洗濯療法』オリオン社、256 頁

八木謙治（1966）「式場隆三郎著作年譜」『民芸手帖』（92）、47 頁

式場俊三編（1977）「式場隆三郎著作目録（1914～1965）」『式場隆三郎めぐりあい（人や物や）』（私家版）、222 頁

山田真理子ほか（2015）「式場隆三郎　著作目録（1914～1965）」『名誉市民式場隆三郎没後五十年記念企画展　炎の人　式場隆三郎：医学と芸術のはざまで』（市川市文学ミュージアム図録 4）市川市文学ミュージアム、69 頁

藤井素彦・山田真理子・喜多孝臣ほか（2021）「式場隆三郎著作目録（1914～1965）」『式場隆三郎 [脳室反射鏡] 展図録』新潟市美術館・広島市現代美術館・練馬区立美術館、263 頁

2）書名『点訳ヴァン・ゴッホ』

書名	内容 （著・編・訳・その他）	発行所	年代
点訳ヴァン・ゴッホ	全二冊	日本点字図書館	昭和 29 年 （1954）

※掲載書の出典：

式場隆三郎（昭和 36 年）「年譜」『現代知性全集（49）式場隆三郎集』日本書房、274 頁

3）書名『ゴッホの芸術とその生涯』

私がはじめて先生にお会いしたのは『ゴッホの芸術とその生涯』を点字になおしてほしい、という電話いただいた昭和 27 年であった。

※文中の下線は筆者が引いたものである。

※掲載書の出典：

本間一夫（1966）「呆然自失」『医家芸術』（式場隆三郎追悼号）10（2）、26-27 頁

4）書名『点字本ヴァン・ゴッホの生涯』

点字本ヴァン・ゴッホの生涯（全二巻、本間一夫点訳）日本点字図書館、昭和 29 年

※文中の下線は筆者が引いたものである。

※掲載書の出典：

医家芸術編集部（1966）「式場隆三郎著作目録」『医家芸術』（式場隆三郎追悼号）10（2）、78 頁

5）書名『ゴッホの「芸術とその生涯」』

私が初めてお目にかかったのは、ゴッホの「芸術とその生涯」を点字にして欲しい、というご依頼を受けた昭和27年であった。

※文中の下線は筆者が引いたものである。

※掲載書の出典：

本間一夫（1971）「式場先生を偲ぶ」『医家芸術』（特集　式場隆三郎追悼：七回忌）15（12）、28-29頁

6）書名『ヴァン・ゴッホ：生涯と芸術』

（昭和27年の隣接地問題の）相談相手は、式場隆三郎先生でした。式場先生は精神科の医学博士であるほか、文学、民芸（まま）にも造詣ふかく、「裸の大将」として知られた山下清画伯の育ての親としても有名です。先生とは、ご著書「ヴァン・ゴッホ：生涯と芸術」の点字訳について相談を受けた程度のお知り合いだったのですが、他に適任者もいないまま、必死の気持ちで思い切ってお願いに参上したのです。ところが先生は実に快く協力を約束され、後援会の結成とその会長就任までご快諾下さいました。

※文中の下線は筆者が引いたものである。

※掲載書の出典：

本間一夫（1980）「苦労した募金行脚」『指と耳で読む：日本点字図書館と私』（岩波新書：黄版138）岩波書店、126-127頁

※以下の2件については、上記の点字本とは厳密にいえば異なる。式場隆三郎旧蔵資料の「点字本」を指している。

7）書名『点字訳　ヴァン・ゴッホの生涯と藝術』

（1）

※年譜の昭和33年の出来事として、「11月、日本点字図書館後援会会長となる。」の記載の上部に「点字本」の写真2枚が掲載され、この写真の下に「出典：式場隆三郎著／日本点字図書館点訳『点字訳　ヴァン・ゴッホの生涯と藝術』上・下巻、日本ヴァン・ゴッホ友の会、昭和29年（1954）」が記載されている。

※掲載書の出典：

山田真理子ほか（2015）「年譜」『名誉市民式場隆三郎没後五十年記念企画展　炎の人　式場隆三郎：医学と芸術のはざまで』（市川市文学ミュージアム図録4）市川市文学ミュージアム、65頁

（2）

「昭和33年（1958）、式場は日本点字図書館の後援会長になっている。」の記載の上部に「点字本」の写真2枚が掲載され、この写真の下に出典「式場隆三郎著『点字訳　ヴァン・ゴッホの生涯と藝術』上下、日本点字図書館・日本ヴァン・ゴッホ友の会、昭和29年（1954）1月、26.3 × 19.0㎝、個人蔵（式場隆三郎旧蔵）」が明記されている。

※掲載書の出典：

藤井素彦・山田真理子・喜多孝臣ほか（2021）「生活と芸術：雅俗をまたいで、③書物愛」『式場隆三郎［脳室反射鏡］展図録』新潟市美術館・広島市現代美術館・練馬区立美術館、139頁

1－2. 日本点字図書館における「点字本ゴッホ」について

次に、日本点字図書館における「点字本ゴッホ」について述べる。

先般の調査研究時に、日本医家芸術クラブ機関誌『医家芸術』第 2 巻第 8 号の 43 頁の掲載、すなわち、本間一夫による次の記述を発見できたことは幸いであった（西脇 2022：50）。

> （前略）数年前、式場隆三郎先生が先生の自著、「ヴァン・ゴッホの生涯と芸術」の点字版をつくられ、ゴッホの故国であるオランダに送ったり、本館に寄贈されたりしたことがあります。その時、先生は「ぜひ著名な著者、あるいは出版社に財政的援助を依頼するよう」と、しきりにおすすめくださいましたが、まこに（原文のまま）卓見といわなければなりません。

筆者が最も注目したのは、本間一夫によるこの寄稿文「もっと点字の本を」が掲載されていたことであった。点字本が「本館（日本点字図書館）に寄贈されたりしたことがあります」という一文には驚愕させられた。なぜならば、日本点字図書館が把握していた史実は、「本間一夫が式場隆三郎から点字本ヴァン・ゴッホの相談を受けた」という「できごと」までであり、そもそもこの点字本がいつ完成し、式場隆三郎の手元に届けられたのか等についての情報は皆無に等しかったからである。

しかし、その後の継続調査の結果、次の二冊の目録が館内に所蔵されていたことが判り、本間一夫が『医家芸術』に「本館（日本点字図書館）に寄贈されたりしたことがあります」と記述した点字本は、確かに日本点字図書館に所蔵されていた根拠を示す手掛かりが得られ、若干の知見を補足することができるようになった。

一冊目の目録は、紀伊国屋書店が 1987（昭和 62）年に発行した「国立国会図書館図書館協力部視覚障害者図書館協力室監修の『点字図書全国総合目録：1980 年以前』である。この目録には、日本点字図書館が所蔵する点字本 4 冊（①児童書『ゴッホ』、②『診察室』、③『洗濯療法』、④『ヴァン・ゴッホの生涯と藝術』）が掲載されていた。なお、「視力障害者愛の友協会千葉点字図書館」には、『山下清　日本ぶらりぶらり』が所蔵されている記載も判明した。

二冊目の目録は、1986（昭和 61）年に発行された社会福祉法人日本点字図書館編『都内各図書館視覚障害者用図書（点字図書・録音図書）総合目録：1940～1983』である。この目録には、式場隆三郎の著作 4 冊（①児童書『ゴッホ』、②『診察室』、③『洗濯療法』、④『ヴァン・ゴッホの生涯と藝術』）が記載されていた。

いずれの目録にも記載されていた書名『ヴァン・ゴッホの生涯と藝術』は、式場隆三郎が本間一夫に相談をした「点字本ゴッホ」を指していることが判ってきた。なお、目録上では日本点字図書館所蔵となっている該当する 4 冊の点字本の点訳者や所蔵の有無などの関連情報については精査中である。

1－3. 式場隆三郎旧蔵「点字本ゴッホ」

筆者が現存する「点字本ゴッホ」の所在を知り得たのは 2020 年 12 月のことである。2015 年に

式場没後50周年の節目に開催された企画展「炎の人　式場隆三郎：医学と芸術のはざまで」の「図録」に掲載された式場隆三郎旧蔵資料「点字本ゴッホ」の写真によってその所在は明らかになった。また、当時、新潟市美術館・広島市現代美術館・練馬区立美術館に於いて巡回開催中であった企画展「式場隆三郎：脳室反射鏡」においても、式場隆三郎旧蔵資料「点字本ゴッホ」が展示され、「図録」に写真が掲載された。これらの企画展開催によって「点字本ゴッホ」現存の朗報がもたらされた。しかし、いずれの図録にも、「点字本ゴッホ」の写真に「昭和33年　日本点字図書館後援会長就任」という活字が寄り添って掲載されるにとどまっており、日本点字図書館が知り得る情報とは大きな隔たりがあった。

また、式場隆三郎が尽力した「盲人福祉」へのまなざしを読み取るに至らなかったことは残念なことであった。そこで、式場隆三郎旧蔵資料「点字本ゴッホ」の閲覧調査が急務となったが、折しもコロナ禍のために式場邸訪問調査の日程は延期され、筆者らが「点字本ゴッホ」を閲覧できたのは2022（令和4）年9月8日のことであった。

１－３－１．資料閲覧利用申請について

筆者は、「式場隆三郎氏は日本点字図書館後援会の会長として尽力され多大なご功績を残されました。しかし、式場氏の「盲人福祉へのまなざし」を読み取ることのできる史実は十分解明されているとは言い難い状況が続いております。そこで、式場氏の真実を探る研究の一助として有力な諸資料の閲覧をご依頼申し上げます。」と申請理由を述べ、式場病院の式場隆史院長に宛、閲覧利用を申請し、『点字訳　ヴァン・ゴッホの生涯と芸術』上下巻および、マルク・エド・トラルボー宛式場隆三郎書簡、式場隆三郎宛マルク・エド・トラルボー書簡の閲覧許可を得ることができた。

なお、医療法人式場病院職員の山田真理子が輸送の任にあたり、2022（令和4）年9月8日（木）～9月9日（金）の両日をもって、日本点字図書館に於いて貴重な資料閲覧調査が実施された。

１－３－２．式場隆三郎旧蔵資料調査「点字本ゴッホ」の結果

式場隆三郎旧蔵資料「点字訳『ヴァン・ゴッホの生涯と芸術』上下巻」の触読調査は、日本点字図書館の館長である立花明彦とともに実施した。なお、この触読調査に先立って、式場病院の厚意により点字本の画像を送信してもらっている。事前に画像から点字を読み取った日本点字図書館点訳ボランティア齋藤宮子が墨訳し、2022（令和4）年2月15日付にて次の貴重な情報がもたらされた。そこで、筆者は、実践女子大学図書館が所蔵する『ヴァン・ゴッホ』（式場隆三郎著、1954（昭和29）年1月に新潮社から刊行）を貸出してもらい読み合わせた。

（点字本の上巻の表紙の墨訳）
式場隆三郎著
ヴァン・ゴッホの生涯と芸術

上巻
1954年1月
日本ヴァン・ゴッホ友の会
刊行
日本点字図書館
点訳

（点字本の上巻の最終ページの墨訳）
（P154）
画家のうちには、何ものか、真実なものがあるか
単に、それが外面的な輝きに過ぎないものであるかなどということは問題にしないような人々は、兄を尊敬するだろう。
そして、そうなれば多くの人々が兄に対して抱いている敵意に対する一つの復讐になると思う。」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
ヴァン・ゴッホの生涯と芸術（上巻）
1953年日本点字図書館点訳

（点字本の下巻の表紙の墨訳）
式場隆三郎著
ヴァン・ゴッホの生涯と芸術
下巻
1954年1月
日本ヴァン・ゴッホ友の会
刊行

日本点字図書館
点訳

（点字本の下巻の最終ページの墨訳）
（P207）
1914年
テオの遺骨　オーヴェールのフィンセントの墓の隣に埋葬さる。24年の苦心になるボンゲル夫人編のテオへの書簡全集3巻刊行さる。
1930年
アムステルダムにて死後、40年を記念する展覧会開かる。375点、陳列さる。

1953 年
生誕 100 年記念祭開かる。ハーグ　オッセルロー　アムステルダムにて大展覧会その他開催さる。各種の記念出版物いず。
日本においても記念展、講演会あり、記念出版物刊行さる。
（P208）
ヴァン・ゴッホの生涯と芸術（下巻）おわり。

（点字本の上巻の「まえがき」の墨訳）
まえがき
1p
　私は精神病学を専門に研究している医学者ですか 30 年前からオランダの画家ヴィンセントヴァンゴッホの研究をやっています。 私がこの画家について書いた本は 30 冊近くになります。ゴッホが生まれてから 100 年目になる昨年オランダと日本では盛んな記念の展覧会があり出版物もたくさん出ました。私は今度東京の新潮社から「ヴァンゴッホ」と言う大きな色刷りの画集と伝記を一つにした本を出します。この人の生涯は 波乱に富み涙なしには読めないほど美しいものです。私はこの人の生涯を目の不自由な方々にも知らせたいと思って本間一夫さんに頼んで

2 p
この新潮社の本から伝記の部分だけを訳してもらいました。
　ゴッホは 37 歳の若さで自殺した画家ですが弟のテオに 600 通余りの手紙を書いています。その手紙は素晴らしいものです。私は今度この手紙のうちからいいものを選んで本間さんに点訳をしてもらって皆様によんでもらうよう準備をしています。皆さんはこの本と手紙の本でゴッホを知ってください。今度「日本版ゴッホ友の会」というものができました。 ゴッホは浮世絵を通して日本を愛した人です。日本にもまたゴッホの好きな人がたくさんいます。もし皆さんのうちでこの本を読んでゴッホを好きになられた方があったら是非友の会へも入ってください
　1954 年 1 月
　式場隆三郎

齋藤宮子からもたらされた情報を総合的に判断すると、1952（昭和 27）年に式場隆三郎から本間一夫が点訳の相談を受け、その時点での新潮社への入校原稿の点訳を日本点字図書館が実施し、1953（昭和 28）年に納められたという史実である。式場隆三郎旧蔵資料「点字訳『ヴァン・ゴッホの生涯と芸術』上下巻」は、日本点字図書館から式場隆三郎に納められた「点字本」を式場隆三郎が日本点字図書館以外で写本してもらい 1954（昭和 29）年 1 月付で日本ヴァン・ゴッホ

友の会が刊行した「著作」として「式場隆三郎展」に展示されたものと推察される。

なお、この「まえがき」によって、この点字本は、新潮社から昭和29年1月に刊行された『ヴァン・ゴッホ』の「ヴァン・ゴッホの生涯と藝術」を点訳していたことが立証された。実際に「点字訳『ヴァン・ゴッホの生涯と芸術』上下巻」を触読した日本点字図書館館長の立花明彦は、「この上下巻となる2冊は、各巻を別々の人が点写した可能性が推察される」と述べている。

さらに、筆者と立花明彦によって、出版された書籍と照合した結果、①「まえがき」は点字本のために式場が記述していること＝新潮社の本の「まえがき」（1953年11月16日付）とは異なること、②日本点字図書館に点訳を依頼した時点の原稿は、「日本ヴァン・ゴッホ友の会」が誕生する前であったこと＝出版された書籍の「年表」にこの項目はない、③ただし、点字本の「まえがき」は、1954年1月付となっているため、「日本ヴァン・ゴッホ友の会」の設立過程と時系列に照合する必要があること、が指摘された。なお、式場隆三郎旧蔵資料「点字本」は、当時の日本点字図書館の装丁とは異なっていることが判明した。

今回の閲覧調査の結果から、この「まえがき」に寄せた式場隆三郎の盲人福祉への気持ちの表れ＝「私はこの人（ゴッホ）の生涯を目の不自由な方々にも知らせたい」は、日本点字図書館後援会長になる以前から抱いていたことが証明された。したがって、この「点字本ゴッホ」は盲人福祉に尽力した式場隆三郎を物語る重要な「展示品」であったことが再認識されたのである。

1－3－3. 式場隆三郎旧蔵資料調査「英文レターコピー」の結果

「点字本ゴッホに関連する記載が誰かに宛てた手紙のどこかにあった」という式場病院職員の山田真理子の記憶[註3)]に照らして、式場隆三郎旧蔵資料「英文レターコピー」調査を実施した。

新潮社が刊行した『ヴァン・ゴッホ』にはM.E.Tralbautのメッセージが掲載されているため、同人物宛の書簡から「点字本ゴッホ」に関する記述も読み取れる可能性が高いと想定し、筆者は55点を通読した。その結果、点字本ゴッホに関する記述を発見することができた。

1954年5月16日付のレターコピーは、式場に宛てた5月10日付のM.E.Tralbautからの手紙に対する式場からの返信である。このレターコピーには、次の一文が記されていた。

> The Van Gogh book in braille which you said would be the first of its kind in the world has been completed and this also I am sending you shortly. It is in two volumes and contains your introduction. Eventually, I in-tend to have the Van Gogh Letters also published in braille.
>
> （和訳）　あなたが世界で初めてと言っていたゴッホの点字本が完成しましたので、これも近日中に送ります。それは二巻で、あなたの紹介が含まれています。最終的にはゴッホの手紙も点字で出版するつもりです。

また、1954年5月16日付のレターコピーは、式場隆三郎に宛てた5月10日付のM.E.Tralbautからの手紙に対する返信であることから、1952（昭和27）年に式場隆三郎が日本点字図書館の本

間一夫に点訳を依頼した「点字本ゴッホ」の写本、すなわち「日本ヴァン・ゴッホ友の会」が刊行した『点字訳　ヴァン・ゴッホの生涯と藝術』は、1954（昭和 29）年 5 月頃には完成していたことが推察された。

2. 日本点字図書館後援会長の導き

式場隆三郎が「点字本ゴッホ」の相談をするために日本点字図書館創設者の本間一夫に電話をしてから 70 年の節目となった。式場隆三郎は日本点字図書館後援会の会長に就任し事業発展に尽力した。民藝運動で培った実態視察調査の重要性を熟知している式場隆三郎は「盲人福祉調査渡米後援会」を結成し、本間一夫と加藤善徳にも敢行させ用具部事業への道を拓いた。

そこで、本章では、この渡米後援活動の実りについて着目する。

式場隆三郎は、この「盲人福祉調査渡米後援会」の活動成果に照らして、『日点文庫 No.3 欧米の盲人福祉をたづねて』の「序」に次のように述べている（式場 1965）。

> （前略）おかげで本間、加藤両氏はアメリカの会議に出席するばかりでなく、欧米各地の施設もまわられ、予想以上の大きな収穫を得て帰ってこられました。ことに欧米諸国のすぐれた盲人用具の収集は 150 点をこえ、この方面に全く未開拓のわが国の盲人福祉にとって、大きな光を与えてくれたのです。（中略）私はお世話をした一人として、ご援助下さった方々に心から感謝し、お二人の大きな功績を今後十分生かして下さることを心から願っております。（昭和 40 年 2 月 17 日付）

1964（昭和 39）9 月 12 日に帰国の後、収集した欧米の盲人用具 150 点は展示され大好評を得た。この展示会は、翌年の 2 月、5 月、7 月に開催され、第 1 回目開催時には約 500 人が参加した（本間・加藤・式場 1965：20-21）。また、1966（昭和 41）年には、新宿小田急デパートに於いて「身障者福祉展」（4 月 15 日から 20 日）が開催され、一昨年買い入れた欧米盲人用具約 150 点も展示された。日本点字図書館発行の『点訳通信』の「点筆だより」には、「（前略）その初日、皇太子ご夫妻（当時）が見え、ご興味深げに 10 分近く、その前に足を止めてごらんになられました。本間と加藤が種々ご説明申し上げましたが、妃殿下は盲婦人用に考案された各種の台所用品について、特に細かく質問されました」と記録されている（日本点字図書館 1966：3）。

加藤善徳は、「日本点字図書館三十五年小史」に、第 3 期の 10 年間は、「基礎形成期とも称すべき時代であった。従来の点字に耳からの本テープが加わり隣接地の購入により将来の拡張に供え、欧米の現実把握によって、日点の行くべき方途が確立したのである。」と述べている。また第 4 期は発展膨張の準備期と位置付け、「昭和 40 年 2 月に、欧米盲人用具部展示会を開催、以後数回この回を催し、ついに購売部（のちの用具部）の発足を見た。」と述べた。昭和 49 年時点での用具部の取り扱い点数は 113,878 点であったと報告している（加藤 1975：2-5）

日本点字図書館の第 3 の事業「用具部」が設置されたことによって、「人・モノ・サービス・情報」の拠点となった。盲人用具は輸入品に加えて国内でも製品化が進んだ。1968（昭和 43）年に

は厚生省から「盲人用具販売斡旋事業」が委託され、1974（昭和49）年には「日常生活用具給付制度」が盲人用具にまで拡大された。式場隆三郎が熱心に取り組んだカナタイプライターや計測・計量器などは年を追って指定され、「盲人用具の流通」が急速に拡大していったのである。日本点字図書館に用具部創設への道が拓けたことは、まさに、式場隆三郎が民藝運動で培った柳宗悦の思想「売り手とは買い手と作り手との中間に在る機関である」（柳 2013：2）の具現化ともいえよう。式場隆三郎が蒔いた種は、用具部事業を任された花島弘が中心となって育み、狭義の福祉用具は、やがて高齢者や障害者も共に使える「共用品」の世界へと拡がっていったのである。

おわりに

本稿では、式場隆三郎旧蔵資料調査の成果を中心に、式場隆三郎による日本点字図書館における後援活動の継続調査結果について述べた。

本研究の成果として特筆すべきことは、式場隆三郎旧蔵資料「点字訳『ヴァン・ゴッホの生涯と芸術』上下巻」は日本ヴァン・ゴッホ友の会が刊行した写本であることが推察され、「点字本ゴッホ」を刊行する式場隆三郎の真意が明らかになったことである。また、日本点字図書館所蔵資料から「盲人福祉調査渡米後援」に尽力した史実が明らかになった。日本点字図書館後援会の設立準備段階から、式場隆三郎は陣頭指揮を執り、白樺派の人々や民藝運動で培った人脈＝人的ネットワークはもとより、医学界、文学界、芸能界の芳名が日本点字図書館後援会の設立趣意書に記されていたことも見逃せないことであった。

式場隆三郎は、そもそも戦前から柳宗悦らと「民藝」の調査研究活動を実施しており、現地調査の結果から「日本の手仕事」を発展させてきた。また、＜「使い手」「作り手」「配り手」[註4)]＞の関係性がいかに重要であるか、という発想を確立・具現させてきた実績がある。したがって、「盲人福祉調査渡米後援」は、盲人福祉の世界における生活用具も「民藝」と同様に「日本の手仕事」として発展し、とりわけ「配り手」を担う購売部の常設（のちの用具部事業）、すなわち、「そこに行けばモノがある。ひとが居る」という拠点づくりのゴールを目指して敢行したことが示唆された。

本間一夫は、式場隆三郎の七回忌に寄せて、「（前略）、特に（昭和）43年の夏からは、図書館の2階に初めて欧米なみの盲人のための売店が設けられ、盲人用の時計、地図、計量器、その他100種に近い盲人用具が並べられ、都内は勿論、地方の盲人たちもつぎつぎと訪れているが、今、もし先生がご健在で在ったら、どんなにかお喜びであったろうと残念である」と述懐している（本間 1971：28）。

日本点字図書館の用具部事業は発展し、現代社会における「だれかの不便さをみんなの使いやすさにかえる」という日本から世界に発信する「共用品・共用サービス」にまで枝葉が拡がり、バリアフリー化する社会の創出の一助となっている。式場隆三郎が拓いた用具部事業への道をあゆんだ本間一夫と加藤善徳、そして花島弘の活動の史実をさらに明らかにすることが今後の課題である。

註釈

1. 日本点字図書館文化資料室の立花明彦、伊藤宣真、川島早苗、濱田幸子らとともに日本点字図書館が所蔵する諸資料の発掘、収集整理分析を継続して実施している。後援会の活動史を探求するためには不可欠である資料「昭和 33 年 12 月　後援会関係綴」、および昭和 39 年の「盲人福祉調査渡米後援会」の発掘に成功し、現在、分析中である。
2. 近年、企画開催された「式場隆三郎展」の図録とは、次の 2 件を指している。
   ①山田真理子ほか（2015）『名誉市民式場隆三郎没後五十年記念企画展　炎の人　式場隆三郎：医学と芸術のはざまで』（市川市文学ミュージアム図録 4）市川市文学ミュージアム
   ②藤井素彦・山田真理子・喜夛孝臣ほか（2021）『式場隆三郎 [脳室反射鏡] 展図録』新潟市美術館・広島市現代美術館・練馬区立美術館
3. 日本点字図書館の伊藤本部長を介して、医療法人式場病院職員の山田真理子氏のコメントは 2021 年 8 月 11 日に筆者に届いた。山田氏のコメントは次の内容であった。＜隆三郎がベルギーのゴッホ研究者であるマルク・エド・トラルボー（1902-1976）に宛てた手紙です。『点字訳ヴァン・ゴッホの生涯と芸術』を刊行した際、「ゴッホの研究書としては世界で初めての点字本なのではないか」といったことを述べたものがありました。＞
4. 野崎潤氏は、「銀座たくみ」の「創業八十年を迎えて：たくみ社員からの一言」に「作り手・配り手・使い手」と表現している。＜柳宗悦の「銀座たくみ」開店時の挨拶文に「買い手は正しい品物が欲しくて、他方で品物は正しい買い手を求めている。それには仲立ちとなる店がどうしても必要」と。この志を心に留め正しい配り手を目指したい一心です。＞と述べている（野崎 2013：7）。

謝辞

貴重な諸資料の閲覧をお許しいただきました医療法人式場病院院長の式場隆史先生ならびに同院職員の山田真理子様に大変お世話になりました。また、日本点字図書館理事長の長岡英司先生、点字本の触読と貴重なご教示を賜りました館長の立花明彦先生はじめ、文献照会ならびに諸資料の収集整理にご助言を賜りました文化資料室の伊藤宣真様、川島早苗様、濱田幸子様、当時の貴重な情報をお寄せいただきました元日本点字図書館用具部長の花島弘様、株式会社たくみ代表取締役の野崎潤様、また点字本の墨訳にご尽力いただきました齋藤宮子様に格別なご高配を賜りました。ここに記して深甚なる感謝の意を表します。

文献一覧

藤井素彦・山田真理子・喜夛孝臣ほか（2021）『式場隆三郎 [脳室反射鏡] 展図録』新潟市美術館・広島市現代美術館・練馬区立美術館.

本間一夫（1958）「もっと点字の本を」『医家芸術』2（8）、42-43.

本間一夫・加藤善徳・式場隆三郎（1965）「＜ていだん＞盲人福祉に生きる」『医家芸術』9（11）、14-22.

本間一夫（1966）「呆然自失」『医家芸術』10（2）、26-27.

本間一夫（1971）「式場先生を偲ぶ」『医家芸術』15（12）、28-29.

本間一夫（1980）『指と耳で読む：日本点字図書館と私』（岩波新書：黄版 138）岩波書店.

本間一夫（1997）「式場隆三郎先生を偲ぶ」『点字あればこそ：出会いと感謝と』善本社、53-55.

本間一夫（2001）『わが人生「日本点字図書館」』日本図書センター.

加藤善徳（1975）「日本点字図書館三十五年小史」『日点だより』（2）、2-5.

日本点字図書館（1966）「点筆だより」『点訳通信』（7 月発行）、日本点字図書館.

日本点字図書館 50 年史編集委員会（1994）『日本点字図書館五十年史』日本点字図書館.

西脇智子（2022）「式場隆三郎による日本点字図書館への後援：日本医家芸術クラブ機関誌『医家芸術』の記事調査より」『実践女子大学短期大学部紀要』（43）、35-52.

野崎潤（2013）「創業八十年迎えて：たくみ社員からの一言」『たくみ』（55）、7.

視覚障害人名事典編集委員会編（2007）『視覚障害人名事典：名古屋ライトハウス 60 周年記念』社会福祉法人名古屋ライトハウス愛盲報恩会、119.

式場隆三郎（1953）「ゴッホの偽作物語」『月刊政界往来』20（3）、163-166.

式場隆三郎（1954a）『ヴァン・ゴッホ』新潮社.

式場隆三郎（1954b）『ゴッホ巡礼』学風書院.

式場隆三郎（1956）「ゴッホの素描と水彩の新文献」『学鐙』53（1）、48-50.

式場隆三郎（1957）「あとがき」（10 月 19 日付）、カール・ノルデンファルク著・式場隆三郎訳『ヴァン・ゴッホの世界：その生涯と作品研究』白揚社、307-308.

式場隆三郎（1960）『洗濯療法』オリオン社.

式場隆三郎（1961）『現代知性全集（49）式場隆三郎集』日本書房.

式場隆三郎（1961）「年譜」『現代知性全集（49）式場隆三郎集』日本書房、268-276.

式場隆三郎（1962）「ヴァン・ゴッホの全作品目録の決定版について」『学鐙』59（9）、46-48.

式場隆三郎（1965）「序」本間一夫・加藤善徳『欧米の盲人福祉をたづねて』（日点文庫 No.3）、日本点字図書館.（※冒頭の「序」に頁記載なし）

式場隆三郎（1981）「ゴッホ巡礼」『炎の画家ゴッホ』（式場隆三郎選集Ⅳ）ノーベル書房、379-693.

式場俊三編（1977）「式場隆三郎著作目録（1914～1965）」『式場隆三郎めぐりあい（人や物や）』（私家版）、215-226.

八木謙治（1966）「式場隆三郎著作年譜」『民芸手帖』（92）、42-50.

山田真理子ほか（2015）『名誉市民式場隆三郎没後五十年記念企画展　炎の人　式場隆三郎：医学と芸術のはざまで』（市川市文学ミュージアム図録 4）市川市文学ミュージアム.

柳宗悦（2013）「たくみアーカイブス　二十年を迎える「たくみ」（1953 年 12 月 15 日刊行「月刊たくみ№⑫・開店二十周年記念号」より）『たくみ』（55）、2.